

講演

「支援の現場で学んだ、 ひと・チーム・世界の変え方

～持続可能な開発目標 (SDGs) を使って、私たちの暮らしと世界をより良くするために～



認定NPO法人テラ・ルネッサンス
創設者・理事・事務局長

鬼丸 昌也 氏



認定NPO法人テラ・ルネッサンス
啓発事業部講演企画・支援連携担当

栗田 佳典 氏

はじめに

栗田氏：今日は「支援の現場で学んだ、ひと・チーム・世界の変え方～持続可能な開発目標 (SDGs) を使って、私たちの暮らしと世界をより良くするために～」というタイトルを進めます。テラ・ルネッサンスは

「地雷」「子ども兵」「小型武器」、この三つの課題に対してアフリカやアジアで活動する国際協力NPOです。そしてSDGsという言葉が最近よく見ますが、私たちの活動も様々なSDGsに繋がっています。もちろんSDGsができる前からの活動ですが、2001年から各地域でそれぞれの課題に向き合ってきました。例えば、カンボジアでは地雷の被害者支援、あるいは地雷の除去活動、そしてアフリカでは紛争に巻き込まれ傷ついた人々の紛争被害者支援などに取り組み、国際協力活動を続けてきました。そして世界で起きている課題の解決だけでなく、課題をたくさんの方に知っていただくため、その課題解決に向けて一緒に取り組む仲間・関心を集めるため日本国内での啓発活動にも力を入れてきました。海外での国際協力や日本国内での啓発活動がテラ・ルネッサ



ンスの大きな柱です。そうした取り組みを評価いただき、昨年ジャパンSDGsアワード副本部長外務大臣賞をいただきました。

テラ・ルネッサンスはこの後に登場する鬼丸が2001年に一人で立ち上げた組織ですが、どのような思いでこの団体を立ち上げ、活動してきたのか、そしてこれからの思いも含めて鬼丸からお話します。その後、今、私が京都で取り組んでいるSDGsについて紹介をします。

鬼丸氏：テラ・ルネッサンスは2001年10月に設立した特定非営利活動法人です。当時、私は立命館大学の4回生でした。カンボジアに行って地雷の除去の大変さ、被害の悲惨さなどに触れ、自分に何ができるのか問いかけたところ、地雷を除去することは出来ない。特別な技術も持っていないし、地雷除去のために多額の寄付を出せるお金持ちでもない。でも、自分がカンボジアという国で見てきた地雷の被害の悲惨さや除去の大変さなどを日本の皆さんにお伝えすることはできる。お伝えして地雷を除去するために寄付を募ったり、地雷を使わないような政治家を選んでもらうというような取り組みだったら僕にもできると思

い、2001年にテラ・ルネッサンスを一人で設立しました。一人から始めた活動ですが、現在、日本人スタッフが約20名、外国籍のスタッフが約80名で、世界六つの国で活動しています。今は地雷だけでなく、主に紛争で苦しみ

や悲しみを受けた方々の自立支援など様々な活動をしています。

ウガンダについて

テラ・ルネッサンスが活動している一つの国がアフリカのウガンダです。日本から約12,500km離れており、日本の空港からドバイなどアラブの国に行き、そこで乗り継ぎするとウガンダまで片道約18時間程度で行ける距離にある国です。このウガンダも含めて今、アフリカ大陸全体は単に戦争、もしくは貧しいだけの大陸ではないことをご理解ください。例えば、電話線を引く前に携帯電話が普及し、携帯電話を使ってお金をネットで送り合ったりドローンを使って物を配送するような技術を使った企業やビジネスが実は日本以上にウガンダやアフリカの方が盛んです。そういう意味でご理解いただきたいのは私たちがイメージしているアフリカは、たぶん日本の20年前、30年前の教科書や当時の報道で知ったイメージのまま止まっているということです。これは単にアフリカだけの話ではなく、アジアやヨーロッパ、もしくは日本国内の課題でも同じで



す。私たちが何かの問題を知った時の情報や印象で認識が止まっていることは、往々にしてあります。

だからこそ、SDGsの推進や社会課題の解決、もしくは男女共同参画を進めるために大事なことは、何が起きているかを知ることです。今何が起きているのかを確認することは、何かを変えるための大切な一歩だと活動を20年続けて学びました。ただ、ウガンダやアフリカも豊かになりつつありますが、最先端の技術を使ってビジネスを展開しているのは一部の地域だけです。ウガンダ北部では約23年間内戦が続き、内戦をする一つのグループが大勢の子どもたちを誘拐して兵士にしていました。ウガンダ北部で23年間続いてきた内戦では、数にはいろいろな説がありますが、武装勢力が約3万6千人の子どもたちを兵士にしていたのです。

子ども兵の実態について

2004年に僕たちは子ども兵を調べるためウガンダ北部に初めて行きました。子ども兵の問題に関心を持ったのは2003年ですが、日本で子ども兵の問題を扱う団体や子ども兵に関する情報がほぼなかったのもので、様々なジャーナリストや海外のNGOのアドバイスをいただき、子ども兵の問題が現在進行形で続いている、子ども兵が実際にいる国に行ってみようという時代に兵士だった経験を持つ人の話を聞くため、2004年にウガンダ北部に行きました。

当時、8人の元子ども兵に出会いました。ある一人は12歳の時にウガンダ北部の武装勢力に誘拐された後、銃の扱い方や軍隊のルールについて訓練を受けます。そして極端な場合、彼もそうで、アフガニスタンやコロンビア、他の国の子ども兵でも確認されていますが、訓練を受けた後に自分の生まれ育った村を襲いに行かされ、そこで残虐な行為をさせられます。理由は簡単で脱走させないためです。彼が自分の生まれ育った村で残虐な行為をさせられ

ると、彼は「もう僕はこの村に、この町に戻ることはできない。だってお父さんもお母さんも村の人たちも僕がやったことを知っているから僕はこの場所に戻ることはできない」と思います。そう思わせ、脱走させないことが子ども兵を巡る状況の中でありました。



写真の彼も誘拐されて兵士のための訓練を受け、武装勢力の大人の兵士と一緒に自分の生まれ育った村を襲いに行かされます。彼の村ですから彼の家があり、家の中には彼のお母さんがいます。すると、大人の兵士は当時12歳だった彼の目の前にお母さんを引きずり出してきて「その女を殺せ」と言います。でも彼は自分のお母さんですから「嫌だ」と言います。そうすると彼は銃の反対側でボコボコに殴られ、今度は「お前がこの女をどんなに大切にしているか、よくわかった。だったらその女の腕を切りなさい。そうしなければお前もその女も殺す」と言

われるのです。自分の行為で万が一お母さんが助かるなら、自分の大切な命が助かるなら、そうせざるを得ません。だから彼はその通り実行します。

子ども兵の心の傷について

その後、僕たちが出会った2週間前に彼は奇跡的に母親と再会できました。彼の左脚は戦闘中に傷を負い、傷ついた子ども兵は戦闘の邪魔のため武装勢力は戦場に置き去りにしました。そこで政府軍が彼を救出しましたが、それは人道目的ではなく尋問のためで、救出して救護施設に運び、敵の情報を聞き出します。そして、その救護施設にたまたま彼の母親も入院していたのです。彼はその母親と再会した時のことをこう語りました。「僕はお母さんが自分のことをどう思っているかすごく心配だった。でもお母さんは「あんた大変だったね、苦しかったね、つらかったね」と言ってくれ、僕のやってきたこと、させられてきたこと、最後まで全部聞いてくれた。それがすごく嬉しかった」と。でも、彼はまるで他人事のように無表情で淡々とこう付け加えます。「でも僕にはわかる。もうお母さんは以前と同じように僕を愛してくれることはない。僕を抱き締めたり、受け入れてくれることはないんだ。だって、僕はあんなことをしてしまったから」と。当時、僕たちにそう語ってくれた彼の年齢は16歳、日本で言えば高校2年生ぐらいの年齢です。こうした子ども兵が今この瞬間も、この世界には確認されているだけで最低でも約25~30万人いると言われています。

子ども兵が存在する原因

なぜ子ども兵が存在するのか調べると、大きく三つの原因や背景があると思いました。一つが子どもは素直で、麻薬やアルコール、宗教などで洗脳しやすいからです。もう一つは武器が小さく軽くなり子どもでも持って戦えるからです。でも最も皆さんと



一緒に考えたいのは三番目で、子ども兵が存在することは紛争や戦争があるということで、この紛争や戦争があることと僕たちの暮らしには関係があるということです。そのことをわかりやすく示す国は、ウガンダの隣でアフリカのだ真ん中にあり今テラ・ルネッサンスが最も支援に力を入れている国、コンゴ民主共和国です。

コンゴはベルギーから独立して以降、特に東側の地域で内戦が続いています。テラ・ルネッサンスは日本のNPOでほぼ唯一、この東側と中央部で活動しています。

コンゴの紛争は内戦です。民族や宗教、言葉が違ったとしても同じ国籍の人が一つの国の中で戦っていればそれは内戦です。国と国とが戦うと戦争です。コンゴの場合は内戦のためコンゴ人だけで戦っているはずでしたが、この内戦を詳しく調べると、内戦が激しかった時、コンゴ周辺のアフリカの国々が「自国のテロリストがコンゴに逃げているため軍隊を出す」、「治安回復のため手伝ってほしいとコンゴ政府に頼まれたから」と言ってコンゴに軍隊を派遣していました。でもよく調べるとそれで終わらず、イギリス、フランス、ロシア、アメリカ、中国などの大

国、先進国がコンゴ周辺国を通じて、もしくは直接やって来ます。コンゴには多数の武装勢力があるため、自分たちの言うことを聞く武装勢力に武器やお金を渡し、戦争のやり方を教えます。戦争の材料がこの国の中に入るため、戦闘は長く激しく続きます。

コンゴ民主共和国の内戦の原因について

なぜ、こんなことが起こり、続くのでしょうか。内戦や紛争が一つだけの原因で起こるわけではなく、様々な原因が積み重なって内戦は続きます。ただ、コンゴの場合はわかりやすい原因があります。それは皆さんのお手元にあるスマートフォン、タブレット、パソコンなどあらゆる電化製品に含まれる、いわゆるレアメタルです。採れる量が少なく、地域が偏り、値段が乱高下します。例えばこうした資源やプラチナ、ダイヤモンドなどの宝石や石油、ウランなどのエネルギー資源が地下に埋まっている限り、コンゴだけではなくあらゆる国も含め、資源を巡り大きな紛争になっていました。コンゴにはレアメタルや貴金属がたくさん埋まっているため、資源を巡り紛争が長く激しく続いていったのです。

僕が初めてコンゴに行ったのは2007年です。コンゴ東部は治安が悪いので、道路等のインフラが整っておらず、大きな町から我々が支援している村まで10時間ぐらいかけて移動することもあります。初めて行った際も、長い移動時間に他にすることがないため様々なことを考え、こんなことを思いました。「この国では20年以上内戦が続き540万人が亡くなり、その9割が普通の市民だった。今もこのジャングルの中で5千人以上の子どもたちが子ども兵として戦っている。そしてこの内戦の大きな原因はレアメタルのような資源を巡るもので、この国で採れる資源は誰が使っているのだろう」と。

ジャングルの中で戦っている子ども兵たちがそのレアメタルを使って作られた、例えばスマートフォ

ンを使って通話やメールをしたり、パソコン使ってビジネスを大きくしているのでしょうか。誰が使っているのか考え、気づきました。「僕たちだ、僕なんだ」と。だから僕が一番ショックを受けました。



武装勢力の襲撃にあった村の診療所

コンゴの紛争では、元子ども兵や多くの女性が傷つけられました。紛争で傷つけられるのは真っ先に女性と子どもたちです。僕はそういった人々の足を踏みつけながら支援しているように思いました。なぜなら僕が使ったり、欲しいと思う物の中にこの国の紛争の原因となるようなレアメタルや貴金属が入っているかもしれないので、僅かかもしれないけれどこの内戦や紛争の当事者かもしれない僕がその紛争で苦しんでいる人たちを支援するのは「偽善だ」と思いました。だから、僕は誰の何のためにこの活動をしようと思ったのかよくわからなくなりました。

でも、僕に出来ることはたった一つで「考えること、考え続けること」でした。ある先輩に言われました。「もし君が今、目の前の悲しみに手を差し伸べることができなかつたとしても考え続けなさい。考え続けている限り、いつか力が付いた時、良きタイミングが来た時に手を差し伸べることができるようになるかもしれないから」と。

世界平和に向けて私たちが出来ること・ 「エシカル消費」について

暮らしや仕事に手一杯の時、社会課題に手を差し伸べることは難しいかもしれませんが、それでも目を逸らさないことが大事です。すると必ず良きタイミングでその問題と縁に触れることがあるはずです。だから目を背けず、考え続けることこそSDGsも含めて社会を良くするためには不可欠だと気づきました。

そして、どの国から来たかわからない資源を使用する製品を無意味に買い換えることが戦争・内戦を大きくすることに繋がるかもしれないと考えました。「僕たちの使う物、欲しい物、暮らしの中に、コンゴのような紛争を大きくしたり、この世界のあらゆる問題や地域、会社、家庭、自分自身の問題の原因が僅かでも含まれている。そんな当事者である私自身が選択を変えることで、例えば人権侵害や環境破壊をしていない企業の製品に変えることで、こうした問題を起こさない社会にできるかもしれない。原因を変えれば時間がかかったとしても、結果は必ず変わるはず」と。だからこそ、私たちの中に様々な問題の原因が少しずつ含まれると勇気を出して認めることで、私たちの僅かな決意や変化、行動は、必ず変化をもたらすと思い、こう申し上げます。「私たちは微力ではありますが、決して無力ではありません」。微力と無力はまるで違う。私たちの社会には様々な問題の原因が僅かに含まれているけれど、私たちにはこの社会を、自分たちを変える力があります。

例えば昔の話で、ある時期のイギリスでは、ダイヤモンドのネックレスから血が滴っている合成写真に「あなたは心から愛する人に、その血塗られた戦争の原因になっているダイヤをあげたいと思いますか」と書いてある新聞広告がありました。アフリカの国でダイヤモンドが原因で激しい戦闘があり、子

ども兵もたくさん使われました。その国のダイヤモンドがどこに多く行ったかというイギリスとイスラエルだったのです。

そのためイギリスの若者たちは自分たちの問題として考え、問題提起をするためお金を出し合い新聞広告を出しました。この広告を見た若者たちが宝石屋に行き、どこで採取・加工したのか確認してから購入したことで、現在の「キンバリープロセス」というダイヤの取引を可視化する動きが広まり、携帯電話などでも同様の動きが広がっています。

まずは関心を持つ人が集まり声を上げることが重要です。そうすると企業や行政は最終的には無視できなくなります。だから問題だと思った人が諦めず、焦らず、何としてでも伝え続け、問題に気づいた人が自分の生活や暮らし、行動を変えることによりこの世界は変わります。このような動きは「エシカル消費」といい、エシカルとは「倫理的」と訳すことができますが、僕はこう意識しています。「関わる人すべてが幸せになる消費の仕方、金融のあり方、生産とは何かという軸で私たちの暮らしを変えていく」。そうした行動により、実は紛争や環境破壊、人権侵害も改善していくことが可能になるかもしれません。

ウガンダでの活動について

最後に、冒頭でお話した子ども兵に僕たちがどんな支援をしているかお話しします。ウガンダでは16年間で230名の元子ども兵の社会復帰を支援し、一人あたり3年間支援します。最初の1年半は食費、医療費も提供しながら安心して学校のようなところで職業訓練、識字教育などを勉強してもらい、1年半経った時点でそれぞれの事業計画、つまりビジネスプランを作ってもらいます。具体的には、そこに10%のお金を貸し付け、ビジネスを始めてもらいます。そして残りの1年半、僕たちも応援しながら、



〔ウガンダ共和国〕 コロナにより一時休校となったが、その後、職業訓練が再開し、学習を続けた生徒（元子ども兵）たち

そのビジネスを少しずつ大きくしていきもらい、合計3年の支援が終わった時、そのまま自分のお店を続けても、その経験を活かして就職してもいいので、自分の収入で家族を養えるようにします。

成果としては、230名の元子ども兵の16年間の平均値で、支援を受ける前の月収が約128円、支援後は平均値で月収約7千円です。これはウガンダという公務員とほぼ同じぐらいです。そのようにビジネスをして自分の収入で自分の家族を養えるという自信が周囲の人々との関係性を改善する、そんな勇気を育ててくれるようになりました。

岩手県大槌町での活動

「大槌刺し子」について

実はウガンダの元子ども兵たちが私たちに人間として大事なことを2011年3月11日東日本大震災が起きた日に教えてくれました。ウガンダからの一本の電話が私たちと東北、特に岩手の皆さんとの縁を結ぶ勇気を育ててくれました。

テラ・ルネッサンスでは、現在では「大槌刺し子」と名前を変えましたが、大槌復興刺し子プロジェクトを岩手県大槌町で10年間やっています。2011

年5月に避難所で出会ったおばあちゃんたちが「やる事が無い」と言っていたことがきっかけで、刺し子という技術を使って商品を作ってもらい、その商品を僕たちが買い取り販売をして加工賃をお支払いし、それを生活再建の一助にしてもらったり、作業中無心になれるため心のケアにも繋がるといったものです。10年間で延べ人数約180名の大槌町や釜石市の女性たちに加工賃として約4千万円以上を支払い、売上として約1

億3千万円販売することができました。

このプロジェクトの背景は、僕は震災当時まだ京都に住んでおり、大地震の様子をテレビで見て、東北にも仲間や友達もいるので支援したいという気持ちになりましたが、一方で、被災地支援はお金も人手もかかるので職員の給与はどうするのかといった心の葛藤もありました。そんな時にウガンダから一本の電話があり、「ウガンダでも津波の映像を見ることができた。たくさんの方が苦しみ、悲しんでいるので、いつも支援してくれる日本人のために私たちが今何をできるのか考え、募金することにした」とのことでした。稼ぎ始めた元子ども兵たちやウガンダ人のテラ・ルネッサンスのスタッフたちが自分たちの稼ぎや給与からお金を出します。たった半日で約5万円集まりました。ウガンダの公務員の平均月給が約7千円の国での5万円です。そして「そのお金で毛布を買ってあげて。寒いでしょう。つらいでしょう」と電話口で言い、最後にこう言われました。「あなたたちは、同じ日本に住んでいるあなたはいったい何をやるんだ」と。それでようやく、やるのかやらないのかではなく、どのようにやるかという選択肢が生まれて、今も続く東北・岩手大槌の

皆さんとの縁を繋いでもらいました。

私たちは元子ども兵たちや紛争で困難を抱えた方々を支援していますが、彼らは決して弱いだけの人間ではありません。弱さを抱えていますが、弱さだけでなく人を思いやること、遠い国の人でも助けたいと思う気持ちも持ち合わせています。つまり、人はいつでも変われることをこの元子ども兵たちから教わりました。だから私たち日本人も、私たちの社会を変えられないことはありません。

SDGs取り組みのポイントについて

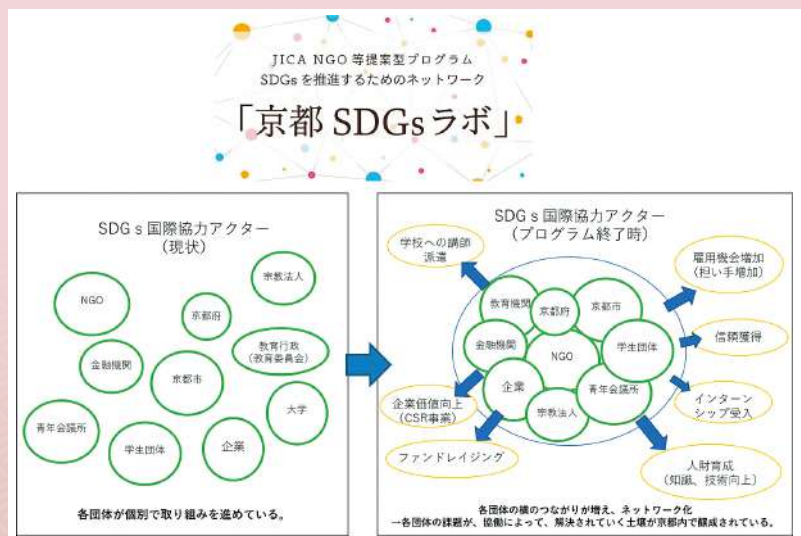
そんな時に手がかりになる一つがSDGsだと思っています。SDGsとは、2030年に人類が達成しなければいけない17個の目標のことです。これは何かを支援するのではなく、自分たちが変化することです。17個の目標を掲げられていますが、今のままでは1個も達成することは不可能です。2030年のSDGsの目標までもう数年しかありません。そのためSDGsを考える時に大事なポイントは、今私たちが私たちの京都府、会社、家庭を持続可能な社会やこれから生まれてくる子どもたちが安心して暮らせる世界のために何を変えるべきなのかということです。テラ・ルネッサンスも京都でSDGsに関連する様々な取り組みをしていますので、栗田からお話いたします。

京都でのSDGsに関する取組 「京都SDGsラボ」について

栗田氏：京都での私たちの取り組みについて紹介します。テラ・ルネッサンスは今、SDGsがたくさんの方と繋がる大切なキーワードだと思っています。日本の国際協力を推進するJICAと提案型プログ

ラムを活用して行っているのが、京都でネットワークを作る「京都SDGsラボ」という取り組みです。SDGsは知る時代から行動する時代になっています。今は個々で活動することが多いと思いますが、繋ぎ合わせると様々な効果が生まれるのではと京都SDGsラボが誕生しました。現在は個人31名、企業団体教育機関が29団体、合計60名団体に登録いただき、オンライン勉強会をしたり、協働を生むためのきっかけ、コーディネートしながら2年間取り組んできました。

取り組みの一つを紹介します。京都市教育委員会とJICA、そして私たちのようなNPO、企業も加えて、今夏に京都市の高校生38人を対象にしたグローバルリーダー育成研修を実践しました。元は海外に行く研修でしたが、現在コロナ禍で海外に行けないため、日本の中でどうにか学びができないかと京都市教育委員会、JICAとともに作り上げたのが、グローバルリーダー育成研修でした。夏休みに京都市立の高校生たちが集まり勉強会をし、SDGsについて知るだけでなく、違う高校の生徒たちがグループを作り実際に取り組む。環境・貧困対策、自分にできる身近なところから実際に挑戦をすることを今も続けています。学校の中で無駄紙をなくすのを競い合



うとか、高校生ならではの発想があります。

そしてSDGsの中でテラ・ルネッサンスは講演事業にも力を入れています。京都市内の小学校や中学校でも講演をし、平和や人権、世界との繋がりについて解説しております。その中で小学6年生の感想を紹介します。

“パラリンピックでは障害を個性とみて、一人ひとりの存在を認めることが大切だと思った。SDGs17の目標を達成するためには他人事ではなく自分事として捉えることが必要だと思った。差別が無く自由に生きられる社会を作るために一人ひとりを尊重し、意見を尊重することが大切だと思った。これからはいろんな人とコミュニケーションを取って自分の意見を伝えたい。”

平和な社会の実現に向けて一歩ずつ踏み出している子どもたちが京都に、日本に、この時代に生まれて良かったと思えるように私自身、大人として恥じない行動をし続けたい、しっかりと背中を見せたいと思っています。私たちは国際協力を行う団体ですが、地域もとても大事だと思っています。だからこそ私は地域の消防団に入り活動をし、町内会長も務めております。地域や一人ひとりに目を向け、SDGsのテーマでもある「誰ひとり取り残さない社会」を本気で作りたと思っています。地域も、世界も両方大事という思いでこれからも平和な社会に

向けて歩いていきたいと思っています。

最後に

鬼丸氏：テラ・ルネッサンスは京都で生まれ、京都で育てていただいた国際協力NPOです。その20年の中で京都の皆さんに教えていただいたのは、伝統だと思います。伝統はたゆまぬ革新から生まれてきます。革新がないところには伝統はありません。SDGsを達成するために必要なポイントはここにあり、SDGsはイノベーションだと思います。自己変革です。絶え間なく自分たちを変えることにより子どもたち、これから生まれてくる子どもたちに安心して平和で、美しい、誰もの人権が尊重される未来を残していくこと。そういう新たな伝統を育てていくことがある意味、SDGsではないかと思っています。

つまり、京都の皆さんが長い時間をかけて育ててこられた革新の連続こそが、この日本、世界においてSDGsを達成する精神的なバックボーンになり得るのだと、僕自身SDGsを実践する人間として強く感じております。そんな大切な場を、大切な土地での暮らしを、そして人々を支えてらっしゃる皆さんの前でお話しさせていただけたことを大変光栄に感じております。本日はご清聴いただきありがとうございました。

